

被災地を訪問して

協同翻訳チーム “Transpinoff” メンバー田邊 絵里子

3日間（10/17～10/19）の東北被災地訪問を経て、本当に数々の貴重な体験やお話を聞くことができました。

今までニュース・新聞記事や Vff の HP を通して色々な映像・写真や話を見聞きしていましたが、実際に被災地を多訪れたことで、媒体だけでは分からないものを多く実感しました。被災地の特に海岸部の町では、半年以上経った今でも津波の傷跡が生々しく残っており、その光景は胸に迫り言葉にできず、ただただこの光景をしっかりと目に、心に焼きつけようと思いました。

宮城県亘理町・七ヶ浜町では皆さんに HP と twitter で発信している「つぶやき」の足湯隊に同行させて頂きました。

・足湯のはじまり

「被災地では灯油や電気、ガスがないため暖房やストーブが使用できず、寒さで震える被災者が大勢います。足湯につかることで、被災者は冷えた体を温められるほか、足湯にはストレスや全身の疲れを軽減させる効能もあるとされ、新潟県中越地震やその後起きた能登半島沖地震などでも脚光を浴びたことから、この試みを実施することになりました。」（日本財団 HP）



【足湯マニュアル】

・七ヶ浜での足湯

もともとプールの水を汲み、トイレを流す水として使用していました。その水を煮沸して使用したことが始まりだそうです。当初は、なぜ貴重な水を足湯に使うのかという批判の声もありましたが、足湯で使った水をトイレの水として再利用することで理解を求めました。

足湯ボランティアは地元の人でないことが多いので、色々なことを気兼ねなく話せ、心情を吐露できる、足を暖め、手を揉みほぐすうちにリラックスでき、話やすくなるようです。そんな時のつぶやきには、「今」必要なニーズが含まれている事が多く、しっかりと汲み取ることが大事との事でした。

また、今回の七ヶ浜での足湯では、被災地の中学生が足湯隊になった時期もあるとの事でした。足湯をされる方は、ご高齢の方が多く「だれだれさん家のお孫さん！」などというところから、今までにない交流が生まれたそうです。

そんな中で発せられた「つぶやき」はまさに、被災者の方々の生の声、心の声。しっかりと皆さんの声を届けられるよう、その思いを感じながらこれからも「つぶやき」がある限りお届けしたいと思います。

・足湯を通して感じた現地でのボランティア

VfF の HP を通して紹介している足湯、お茶のみ喫茶、たべさいんプロジェクトを含めた「虫の目」発想の地元に着した活動が、タイムリーにニーズを汲み取り、その活動が地元の交流を生み、自立をサポートしていると実感しました。また、フェーズごとのボランティアのニーズが違うこと、現地のニーズにもタイミングがあるという事も知りました。

実際、避難所が閉鎖され、被災者の方が仮設住宅へと移住された今、フェーズの変わり目を向かえつつあるとの事でした。印象的だったのが、地元の自立をサポートする為にも、ボランティアの撤退時期が重要という事でした。地元が自立する為には、やはり地元が主体とならなくてはなりません。だからこそ、ボランティアが去った後も地元でボランティアが行っていたシステム（今回の足湯から現地の交流サポートなど）を残せるような仕組みを作ることが重要とのことでした。今までそのような視点から考えたことがなかったので衝撃を受けました。但し、復興までは長期的なフォローが必要であるとの事で、そのタイミングやバランスを見極めるのはとても難しいことだと感じました。

滞在中、ボランティア同士でも交流が生まれ、色々なお話を聞いたことはとても貴重な体験でした。それぞれのボランティアの方が、常にアンテナをはり、より良い活動への提案をし、行動されていることも印象的でした。その方々が経験し、感じられたことを持ち帰り、発信することで、この震災についてより多くの方に身近に感じて頂き、意識を高め、支援の輪が広がり、更には今後の来るべき震災に対する防災意識が高まればと改めて感じました。



【ボランティアきずな館】



【七ヶ浜の良さを再認識「やっぱり七ヶ浜」】

・おわりに

数日前、ようやく復興予算が正式に発表されました。これから、地元の人々が自らの力で立ち上がる為に有意義に使われることを祈ってやみません。

陸前高田で出会った M さんは、自らの自宅も流され被災されたにもかかわらず、とても明

るく前向きで、その M さんの「これからも高田を宜しくお願いします。」という言葉は、大変重みがあり心に深く刻まれました。訪問中も、被災者の方から「自分たちも何かをしたい！！」「恩返しをしたい！」という声をたくさん聞き、新聞でも仮設店舗で営業を始めたという記事を見るようになりました。まだまだ長く険しい道のりですが、東北の復興を願ってやみません。また、今回の訪問で改めて人と人のつながりの大切さ、生のことばの重みを感じました。その思いを忘れずに日々、自分なりにできることは何かを考え、少しずつでも行動していきたいと強く思います。